

特 245

236

パンフレット 第一輯

金子念阿述

融和運動の哲学

兵庫縣清和會



0038987000

0038987-000

特 245-236

融和運動の哲学

金子念阿・述

兵庫縣清和會

昭和 2

AGH

1

この著作物は、著作権者不明のため、著
第67条の規定に基づき、平成12年3
月で文化庁長官の裁定を受け使用するも

特245
236



融和運動の哲學

自分で讀みかへして見て、云ひ足りないと思ふ點の多い此の小冊子も、全體を残らず讀んで下されたら、その方には、多少の何ものかを掴んで頂くことが出来ると思ひます。 — 金子生 —





はしかき

多くの人々は所謂部落問題は感情上の問題で理論上の問題ではないからして如何に人間の理智を進めて見ても融和の實現を期することは不可能であるといふ風に考へて居るらしい。一理ある考へ方である。吾々にしても此の問題が多分に感情の支配を受けて居るといふことを否定せむとする者ではない。併かしながら感情上の問題であるから理智を進めても融和の望みはないといふ意見には賛意を表することは出来ない。今日部落問題が兎角

祇徇主義に陥り一つ所を何時までもグル／＼渦を
巻いて居るやうな状態に在るのは主として上述の
如き謬見に禍され明徹なる理論の討究が封せられ
て居る爲めではないかと思はれる。吾々は感情を
無視してはならないと同時に理智の判断を誤つて
はならない。總へての人間が悉く釋迦や基督の如
き至慈熱情に燃えて居るならばいざ知らずさもな
い限り吾々は理智の判断に依つて感情の疎隔を取
除いて行くやうに努める必要があると思ふ。否な
吾々は最も純眞なる感情は最も公明なる理論の裡

から萌芽しなければならぬものだと思言したいの
である。是れ本會が「融和運動の哲學」を以て本
會パンフレット第一輯として世に問ふ所以で此の
小冊子が部落問題解決の爲め幾分でも貢献するこ
とが出来たら大なる幸であると思ふ。希くは一度
此の冊子を手になられた方は最後のページまで熟讀
玩味せられむことを。

昭和二年一月

兵庫縣清和會

科學、研究、反省

(自序に代へて「清和」第三十一號より)

(一)

治療學の先驅に病理學があるのは當然である。一つの問題を何ぞか解決しやうとするならばその問題の依つて來たる所以、問題の根據する所を先づ明かにしなければならぬ筈だ。然らずんば適當の解決策に到着することは自ら出來ない。

(二)

所謂部落問題！これは國家的に社會的に、將た道德的に重大であること、今更説く迄もなく明白であり、世間の人もさう云つて居る向きが尠くない。然し、眞實に此の問題の重要性を認めて居ない故か、治療學の先驅として病理學の必要を知らぬ人が甚だ多い。毎日の自分の生活に没頭し、或は金儲や享樂のこゝより外に考へないやうな人々でなく、眞實此の問題に係を持つ所の人々でさへも、しかも問題の解決に差別觀念の絶滅を希望し、その爲めに努力す

る人々でさへも、治療學の先驅としての病理學の必要を痛感せず、その研究に頭を向けず、それに對して深い考察を拂はないやうである人が尠なくない、然り、世間の大多數に於てさうである……今日云ひ得るであらう。

(三)

それは一體何故であるか。私は此の點に深甚の注意を致さねばならぬと思ふ。何となれば、病理學の必要を價值を知らぬ心は、その儘、此の問題を造つた心である、少なくとも、今日此の問題を存在させて置く心である……私は思ふ、これからその理由を述べて見たいと思ふ。

(四)

事物の因果關係を知らうとするこゝ、これが系統的に秩序的に進められて行く時、それが科學名づけられるのである。病氣云ふ人體の現象、之れはどんな因果關係を辿つて生起するものであるか、つまり、病氣の原因は何であるか、之れを研究し明かにしやうとするのが病理學である。此の病理學が完成した時に、病的現象の原因が明かにされた時に、次いで治療の方法は發見されやう。要するに病理學が發達するかしないかは、人間が事物の因果關係を明かにしたい云ふ要求が多いか少ないかに依つて別れる。換言すれば、人間が科學的な興味を多く持つか持たないか、科學の價值を必要を深く知つて居るか居ないかに依つて、別な結果を生ずるのである（そして病理學が發達するかしないかは、その儘治療學の上に大きな差異を持ち

來たすのである）

(五)

世に病める人は多い、その周圍の人は猶多い、而してその病者の全快せんことを希望し祈願するこゝは熾烈である。しかもその人々が、病理學の價值を必要を知つて居るか否うか。勿論私は、總ての我國の人々をして皆病理學者たらしめたい云ふものではない、たゞ常識として、その價值を必要を知つて居てくれ、ばよいのだ。けれども、専門の學者其他、それも比較的少數の人を除いて、社會の常識を認むるの程度に迄來て居ない。廣く一般的に云つても、事物の因果關係を明かに知りたい云ふ欲求、即ち科學的の興味、科學の價值、必要など云ふこゝが常識界に勢力を占めて居ない。（實例的に云へば、トラホームだの結核病が多いのはその證據である）勿論過去と比較して見れば進歩したか、或は次第にその價值必要を認むるの傾向があるかは云ひ得る。けれども私は、その未だ甚だ尠きを嘆くものである（或は希望を大きく懸ける故かも知れないが）

(六)

此の科學的な心の尠いこゝ、之れは我が國人の一つの短所ではないか。病氣平癒に熱禱を捧ぐるものが、病理學の價值を必要を知らず、日常生活の上に諸種の傳染病を流行させて、敢て不思議さしない如きは、我が國人の短所を明白に表現したものではないか（ほんこの病氣のこ

さばかりではない、其他の諸種の方面に、此の短所はよく顯はれて居る。而して所謂部落問題が今日存在して居るのは、矢張り此の短所の重大なる一つの顯はれである……私は思ふ。

(七)

所謂部落問題、之れは差別問題とも云はれて居る通り、差別の觀念が問題の中心である。従つて、解決は此の差別の觀念を除去し拂拭し得ることであるのである。即ち問題の中心は、人間の心の中にあるのである。而して、此の差別の心は、(一)さうして發生したのであるか。(二)又さうしてそれが存続して居るか。それから(三)さうすれば此の差別の心は消滅するであらうか……此の三つが問題であらう私は思ふ。つまり、心理的な問題であり、社會學的問題であるのである。

(八)

以上三つの問題、之れに對して多くの人の意見は違ふ。即ち見解に相違があるから、運動の方法も自ら種類が出来やう。然し要するに、心理學的、社會學的問題であるので、それらの深い考察が必要であることは勿論である。所が、常識の中に科學的思想を多量に持たない我が國人は、病人が平癒を祈りながら病理學の價値必要を知らぬやうに、此の問題に就て、種々な因果關係を、深き考察的のこしない人が多い、従つて正鵠を射るの議論や考へが尠ない(勿論、此の問題の専門家?に對してこれを云つて居るのではない、今私が呼びかけて居るのは、専門

家以外の人々に對してある)所謂改善論などを軽々にする人には、深い考察を拂つて居ないのが多いのである。

(九)

私は、イヤニ心理學だの社會學だの云ふけれども、實はそんな學問をしなければ差別の觀念が無くならない云ふのではない。私の此の問題に對する考への結論を簡短に云へば、差別の觀念は迷信である、人間の宗教的な觀念の悪い一面の顯はれである、故に、事物の眞實の相(すがた)を明瞭に見極めやうとする時に、迷信云ふものは消滅する、事物の因果關係を闡明しやうとする態度を取る時に迷信は姿を隠すものである。だから、何々學云ふやうな、敢てむづかしいことを云ふ必要もなく、たゞ深く、此の問題の眞實の相を見極めて見やう、此の觀念を對象として、諸種の因果關係を考へやう、つまり、此の問題を研究して見やう……云ふ態度になれば、その儘差別の觀念は消滅する。何となれば前述の如く、差別の觀念は迷信だからである。乃ち敢て心理學だの社會學だのこむづかしさに云ふ必要はない、單に研究して見やう云ふ態度になればそれでもよい……私は云ふのである。

(十)

最後に私は、大に讓歩して一言しやう。研究云ふ言葉の如きはイヤニむづかしい言葉だ云ふなら、それも一先づ撤回して見やう。そして、兎に角考へて御覽なさい……云つただけ

でよい、考へて見るこゝ、別の言葉で、反省を云つてもよいのである。假りに諸君が、差別の觀念を持つて居るに、而して、それは正しいか正しくないか、何の理由で差別の觀念を持ち得るのであるか、差別の觀念を持つて宜しいと云ふ理由がどこにあるか。若し假りに、被差別の人々の中に、非難に値するやうな人が居り、或は非難に値するやうな事があるとしても、それと同じやうな人、それと同じやうな事が、差別する方の側に無いと云ひ得るか、賢不肖、有徳不徳は、いづこ、如何なる時にもある。諸君は宜しく自分の持つてゐる心持を反省すべきである、然らば差別の觀念は消滅するだらう、若し夫れ自分に差別の觀念が無ければ反省を慫慂し要求するこゝに依つて、他の差別の觀念を拂拭し去るこゝが出来らう。敢てまた茲に私は「反省」を要求するのである。

昭和二年二月十五日

金子念阿

融和運動の哲學

目次

はしかき

科學、研究、反省……(自序に代へて)

「歴史」の跡

世の進み……………一

天文學的過渡時代……………三

地質學的過渡時代……………四

生物學的過渡時代……………五

社會學的過渡時代……………七

「歴史」の見方

過去より將來へ……………	一〇
單純、複雑……………	一二
相 關(複雑化内容の一)……………	一四
個 性(複雑化内容の二)……………	一六
作者と役者……………	一八
不自由、自由……………	二〇
神に肖たるもの……………	二二
自己の發見……………	二三

所謂部落問題

二つの命題……………	二五
佳き日の爲めの問題……………	二七

問題發生の眞因……………	二九
小數意見か多數意見か……………	三二
自覺圈擴大史……………	三五
聖天子、明治天皇……………	三六
天業に乗ず……………	三九
努力の必要……………	四一

我が清和運動

清和會の眞面目……………	四四
--------------	----

融和運動の哲學

金子 念 阿

「歴史」の跡

世の進み

昨日の淵は今日の瀬と、變るならひの飛鳥川……云々と云ふ言葉もあります、これは所謂「諸行無常」の意味で、此の世の中と云ふものは、いつも移り變るものであると云ふ考へであります。

(1) 此の考へは、佛教思想から來たもので、如何にも世の中の實際に當てはまることです、年々歳々花相同じ、歳々年々人相同じからず、變ると云ふことを最小限

(2)

度に見ても、昨日より今日は古くなつて居る、生き物が年を取つたと云ふばかりではなく、萬物皆悉く古くなつて居る、年々歳々花相同じと云つても、去年の花と今年の花と、只その形が似て居ると云ふだけで、決して同一の花ではないのであります。

此の考へは、決して佛教特有ではない、ギリシヤに於ても、ヘラクライトスが「萬物流る」と云つて、總てのものは移り變ると云ふ意味であります。つまり、物が刻々變つて行くと云ふことは、かなり古い時代の人々も氣が付いて居た所であります。

けれども、此の單なる「移り變る」と云ふことは、近世科學の發達に依つて、そこに新しい意味を持つて來たので、決してそれは單なる變移でなく、それはある秩序ある變り方である、即ち一種の進化であると云ふことが明かにせられたのであります。

天文學的過渡時代

諸行無常とか萬物流るとか云ふやうに、總てのものは固定不變ではない、即ち此の世の中も昔から今日のやうな有様ではなかつた、先づ根本的に云へば、我々の住んで居る此の地球、否此の地球が屬して居る太陽系さへも、昔と今とは異つて居たのである、天文學的一學說を借りて云へば、此の太陽系は、昔は極端な高熱の瓦斯體であつた、それが自轉して居るうちに、小さい塊りが幾つか出來て、それがその大きな瓦斯體から分離した、その分離したものが地球其他の遊星となり、それからまた分離して、各遊星の衛星となり、元の大きなのが今の太陽として中心に残つたのである、これが地球發生の話で、これを天文學的過渡時代と云ふのであります。

(3)

地質學的過渡時代

太陽から分離した地球は、その高熱の瓦斯體が、次第々々にその熱を失つて、ドロ／＼した一つの塊りとなつた、それが長時間を經過するうちに、猶々熱を發散し冷却して來た、その表面に固いものが出來てきた、それが此の地殻であつて、山とか平原とか谷とか云ふ地球の表面であります、勿論表面と云つても今日の如き有様ではなかつた、その後幾變遷をして居る、否、今日只今と雖、常に變化を續けつゝあるのであります。その大なる例は、火山の爆發とか大地震とかで、伊太利のポンペイ市が、西曆紀元六十三年及七十九年のヴェスウイアス火山の爆發で、そて降つて來た灰の爲めに埋没してしまつた、建物も見えなくなつてしまつた、勿論多數の住民も死んでしまつた、それが今から百八十年ばかり前に偶然の事から發見されて、近年それを發掘して今日では世界の珍奇なもの、一つに數へら

れ、多くの人々がそれを見るために、世界各國から出掛けて行くと云ふ程であります。兎に角、長い昔に地球が熱球であつたものが、次第に冷却して表面に地殻が出來た時、空氣も出來た水も出來た、そしてそこに、單細胞の生物、原始生物、顯微鏡でなければ見るここの出來ぬやうな微生物が發生したのであります、これが生物發生迄の話で、大體これは今日の地質學等で證明出來ること、これを地質學的過渡時代と云ふのであります。

生物學的過渡時代

既に微生物が發生した、それは如何に小さくても、一個の生命であります、それには成長があり衰亡があり、また後繼者を残すと云ふことがあります。子孫を残す方法は、初めは、今日の發達した生物のやうに、雌雄が生殖作用を行ふて、そして後繼者を生むと云ふのではなく、單細胞の微生物は、それ自身の分裂であ

るけれども、そしてそれを反覆し繼續して行くうちに、次第々に元の形と同じものではなくなつた、複細胞の生物が出来た、それから段々複雑なものになり、雌雄が出来、子孫が生れて永續して来たのであります。

去年の朝顔の種を今年蒔いても、今年の花は必ずしも去年と同じではない、子は親に似て居ると云つても、決して全く同じでない、それ等の間に多少の違ひはあるのであります、幾代もく、子から孫と代を重ねて居るうちに、その違ひが次第に積り積つて、遂に殆んど別の種類かと思はれるやうなものになる、それが即ち、今日多種多様の生物がある所以で、あるものは爛漫と咲いて、春を飾る櫻となり、あるものは吠ゆれば百獸も恐れ戦くと云ふライオンともなり、又あるものは悠悠太洋の上に游泳して、航海者に海の偉觀を驚嘆させる鯨となり、あるものは兎となり龜となり、鳥となり魚となり、そのうちで最も恵まれたるものが、我々人間となつたのであります。

かゝる變化を爲した時間はどの位の長さであるか、これはまだ正確なことは計算されて居ない、然し此の事實は、生物學其他諸種の科學の證據を提出してくれることが、確實明白なことであります。たゞその進化の動力、即ちどうして、單細胞の微生物が、單なる變化でなくつて、所謂高等と云ふ言葉が當てはまるやうな發達を爲したのであらうか、も一つ云へば、何故簡單な微生物が、こんな複雑な動物、人間に迄進んで来たのであらうか、此の理由に就ては、種々な學者の種々な説がある、私もあとで私見を述べて見たいと思ふが、兎に角此の進化の事實は否定すべきでないのであります。これを生物學的過渡時代と云ひます。

社會學的過渡時代

生物が進化して、遂に地上に人間が出来た、別の言葉で云へば、生物は、その中のあるものが、人間と云ふ段階に迄進歩して来たのであります。

けれども勿論原始時代の人間は、今日のやうな文化の状態ではなかつたのである。山の横の岩の蔭に、假の宿りを取つたかも知れない、樹の枝の上に、一夜の夢を結んだかも知れない、たゞ人間の特長は、社會生活を爲すと云ふところにあるのであります、そしてそれが、進歩の原因、大動力であるのであります。

こゝで、社會と云ふ言葉を少しく説明して置く必要があると思ふ。社會と云ふのは、共同生活の一つの集團と云ふことであります。即ち人間の生活はそれであつて、虎とか獅子とかの生活は、全く孤立の生活である、單純な意味での獨立獨歩かも知れない、兎に角、一匹で居ても五匹で居ても、生活の様式も内容も何の變りはない、彼等が集つてもそれは偶然であつて、生活の仕方にも何の變化も及ばさないであります。所が人間に於ては、たゞ一人では生活が出来ない、多數が集つて相共同し合ふこと、そのことのお蔭で生活をするのであります。

人間は、昔に於て今日の文化を持たなかつたと云つた、然り、今日知られて居

る人間の最も古い生活様式は、所謂狩獵時代なるもの、遊牧時代なるもので、少數の人が一團となつて、簡単な武器を持ち、獸を狩りして生活し、自然にあるものを取つて食べては、それからそれへと移り住んで居た。此時と雖、恐らく生活上の分業が行はれて居たであらう、石を砕いて單純な武器を造ること、今日の刀や鎗の先や矢じりのやうな形のものも石で造つたのであるが、それも仲間のうちのその技に長じて居るものが、仲間中のもを引受けて造つたらう、その代り（代り）と云つても交換の意味ではない、仲間が取つた獸の肉は食つて居たらう、その他、鎗を使ふことの上手は鎗を使ひ、石投げのうまかつたものは石を投げ、各自がその特長を發揮して、一團體として生活して居たのである、決して一人が孤立して生きて居たのではないのであります。

それから次第に團體の人口が殖えた、即ち子孫の數が多くなるに連れて、自然に存在するものだけでは團體の生活が困難になつて來た、そこで、種を蒔いて收

穫を見る方法、即ち農業、動物を養ふてその子孫を殖やし、それを自分達の生活の資料として用ゆること、即ち牧畜などを發見して來た、此の時代に於ては、猶々以つて相共同し合ふ生活である、團體生活である、社會生活である、即ち各自が、人間生活の一部のことを爲すと同時に、自分の爲さざることを他人にしてもらひ、相補つて生活を致すことになつたのであります。

それから、團體は家族と分れ、國家を形成するやうになつてからは、益々影響の度が密接になり影響の範圍が廣くなつて、遂に今日のやうな世の中が出来たのであります、これを社會學的過度時代と云ひます。

「歴史」の見方

過去より將來へ

上來述べたことに依つて、世の中が「移り變る」と云ふことは、單なる轉變では

なくして、そこに新しい意味がある、それが近世科學の發達に依つて證明されることに相成つた……と云ふことが明かになつたと思ひます、即ちそれは進化である、進歩であると云ふことであります。

こゝで私は、進化とは何ぞや、進歩と云ふことの意味を、もつと大に考へて見たいと思ふのであります。たゞ一概に進化とか進歩とか云つても反對に退歩かと考へられることも甚だ多いので、たとへば犬の鼻、猫の目、馬の走る速力等に比して、人間は大に劣るばかりでなく、人間自身と雖、かつて行燈の時代と、今日の電氣の時代とに比して、その視力が大に劣るやうになつたのは明白な事實なのであるからであります。

然らば進歩とは何であるか、私は此の意義を考へたいと思ふ、それは何の爲めであるかと云へば、明日を豫見したい爲めであります、即ち此の人生、世の中はどんな風に變つて行くものであらうか、過去の進化の事實から、その眞意義を抽

き出して、以つて將來の進みの方向を知り、我々の日常生活に指針として役立たたいと思ふのであります、否、それに依つて、我々の心の、幾多の問題を解決しやうと思ふのであります。

單純、複雑

人間が經來たつたあとを、抽象的に考へて見ると、そこに何物が残るであらうか。人間を遡つて生物に、生物を遡つて地球に、地球を遡つて太陽系に、かう考へて見る、そこに一貫の變化の形式がある、それは何であるか、單純より複雑と云ふことであります。

太陽系が元一つの高熱な瓦斯體であつた時、これをカントとかラプラスとか云ふ學者の言葉を借りて云へば星雲と云ふ。此の星雲の状態は實に單純なものです、所がこれが、太陽となり地球となり、其他の火星だの金星だの、多くの遊星とな

つたばかりでなく、その遊星から別れた衛星、即ち地球から云へば月ですが、他の遊星は多くの月を持つて居る、それが整然と大空を運行して居る現在を見れば如何に複雑なものに成つたであらうませうか。

また此の地球を見ても、今日では山あり谷あり海ありて、否、見渡す限りの氷原や、百花爛漫の花園のやうな所もある、實に複雑極まり無き状態であります。

生物界を眺めてもまた同じで、最初に於ては皆單細胞の微生物であつたものが子々孫々と經つうちに、次第々に變化して、今日のやうな多種多様になつた、二十日鼠のやうな小さいものも、鯨のやうな大きいものも、共に之れ動物である、鳥の類、昆蟲の類、實に千態萬様である、否、人間の伶俐なる（然り、昔と今とを比較せよ、兎に角如何に伶俐になつたか）之等は眞に複雑化の標本であらう。

それから人間社會に至つては、これこそ驚嘆に値するもので、水草を追ふて居た原始時代と今日とを比較する迄もなく、十年二十年の前をかへり見ても、如何

に速かに複雑になりつゝあるか、理解される、生活の仕方、政治の形式、一切萬事が皆然りであります。

相 關 (複雑化内容の一)

宇宙人生、皆之れ單純より複雑になりつゝあるの事實は、歴史を眺めて否むべからざることであるが、此の複雑と云ふことは、變つたものが雜然漫然と多くあると云ふことではない、複雑化には立派な内容があるのです、即ちその一つは「相關」と云ふことであります。

太陽系が今日のやうな存在、つまり運行を續けて居るのも、一つ／＼の星がお互に相索制し合つて居るからであつて、決して思ひ／＼の行動ではありませぬ。動物の生活が植物の存在を要したり、植物がまた動物のお蔭を蒙つたり、總てのものは相關係し合ふ事に依つて、その存否、榮枯盛衰があるのである。而してこ

れを人間社會に見れば一層その明かなる事を承認せざるを得ないのであります。我々の生活に要する一切の資料、そのどれを見ても、一枚の紙、一本のペン、皆之れ「世界」が造つたものである、空間的に現在生存して居る無限の人間の力と時間的に過去から存在して居た無限の人の力と、それに人間以外の力（これを假りに自然力と云ふか）とが加はつて、我々の生活に必要なものが造られて居るのである。これは必ずしも物質的な意味ばかりではない、精神的な生活資料、文藝、美術、科學、哲學、宗教の類も、皆之れ「世界」が造つたものである、斯くて人間は絶對の孤立は許されない、孤立しては存立不能になるのであります。夕刊のロンドン電報一つが、如何に我々日本人たるものにも、關心の對象になるかを思つてもわかります。

如斯、複雑化と云ふことは、それが相聯關すると云ふ立派な内容を持つのである、即ち進化すると云ふことは、關係の範圍がますます／＼廣くなると云ふことを、

關係の密度がいよ／＼高くなると云ふことを意味するものであります。

個性 (複雑化内容の二)

複雑化の内容は、前に述べた相關係すると云ふことだけの一つではない、今一つの内容としては個性の發揮と云ふことであります。

地球は太陽でもなければ月でもない、地球自身の特長を持つものである、熱帯には熱帯の特長あり寒帯には寒帯の特長あり、皆之れ一種のそれ自身の個性であります。それから生物の發生を見、その生物が今日のやうに多種多様になつて來れば、それは猶更個性が出來たことである、魚と鳥とはその昔は同じであつたが、今日兩者と分れてしまつては、その作用もその状態も全く異つたものになつてしまつて居る、鳥と蜥蜴とは最近分れたものだと生物學は證明して居る、即ち鳥と蜥蜴とは最近迄同じであつた、それが一方は餘り變化しないで蜥蜴として残り、

一方は變化して鳥になつてしまつたと云ふのである、しかも今日、鳥と蜥蜴と見て同一なりと云ふ人はない、共に作用も状態も異つて居て、立派な特長が兩方にあるのである。斯くて複雑化と云ふことは、その複雑になつた各が、各別なる特長、即ち個性を持つやうになるのだと云ふことであるのであります。

これは、近く人間の社會を見れば猶わかることで、かつては自給自足の經濟状態であつた、即ち自分の生活に必要なものは自分で造つた(と云つても全くの一人ではない幾人かの集りである)所が、次第に世の中が進むに連れて、各自が特長を發揮して來て、部分を造る分業となる、そしてそれを交換し(今日の言葉で云へば賣買)それで各が生きることになつたのである、即ち今日の經濟状態になつた、國際的に迄なつたのである、而してこれは、世の中が進むに連れてはなく、これそのものが世の進みなのである、だから、時間が経つに連れて世の中が進むと云つた方が適當であります。

其他、政治の有様でも、學問の發達でも、皆以上のことを證明するもので、文化は分化であり、各がその特長を持つやうになることである、換言すれば、個性を明瞭にすることであるのであります。

作者と役者

作者が脚本を書いて役者が舞臺で此れを演ずる、上手に芝居をするか下手にするか、これは役者の領分に屬することであるが、兎に角、筋は作者に依つて定められてある、落付く所に落付くのであります。

宇宙人生の進みも矢張りさうではないか、星雲の状態から生物發生に至る迄は勿論、生物が發生してから、それが生き變り死に變りしても、それは決して生物自體の自由ではない、生何處より來たり死何處へか行く、我々が生れて來たのも自由意志ではなかつた、成長するのも年を取るのも、やがて死んで行くのも皆自

由ではない、しかも自分以外の力で、生れたり死んだりすることを繰り返へして居るうちに、微生物の状態から今日の人間となり、石投げや石の鎗で獸を殺して生活して居たものが、世界的な經濟組織の下に生きるやうになつたのは、洵に驚嘆すべき事實ではないか、個々の生物は、漫然と生れて漫然と死んで行く、然るにその間に此の進みがある、これは生物(人間をも含む)は役者の如きものであつて、大宇宙意志とも云ふべきもの、即ち此の宇宙人生を進化せしめたもの、それは作者にも相當するものがあつて、斯く引廻はしたのではあるまいか。斯う考へて來ると、今迄變つて來たところの、宇宙人生の進みを見て、今後の進みを我々は想像することが出來やうではないか、即ち「宇宙意志」の「思つて居ること」を推量し付度することが出來やうではないか、言ひ換へれば、過去を眺めて將來を豫見することが出來る筈である、然らばそれが、我々の行動の指針となり得るのであります。

不自由、自由

作者が別にあつて、我々は役者であるとするならば、我々の自由は、大にその範囲を狭くされたやうであります、然り、絶對的の意味では我々は自由ではない、然し、それは我々の絶對不自由を意味するものではありません。

我々は自由の自覺がある、此の自覺と云ふことが絶大な深甚な意義であると思ふ。即ち此の自覺は理論ではない、自分自身の感じである、此の感じのあることは、誰でも否定することの出来ない事實、冷暖自知する所の心の中の事實である、であるから、誰でも責任感と云ふことを持つて居るのであります。

誰でも絶對に自分に自由の感じを持たないならば、従つてまた絶對に責任感を持つて居ない筈だ、然らば責任感を多少でも持つて居る以上は、必ずそこに如何に少なくともある範圍の自由を自分が持つて居ることを否定出来まい、これは論

理でなくして、自明なことであります。

如斯、我々は一方に於て大自然に、即ち宇宙意志に引き廻はされて居る、此の意味では不自由であるが、他方自由の自覺がある、責任感がある、自分の努力で何事をか爲し得る自覺がある、否、その自覺のもとに、人間は常に各何事をか爲しつゝあるのであります。

然らば此の矛盾してゐるやうな事實はどうして出来あがつて居るのであらうか、どう説明が付くのでありませうか。

神に肖たるもの

人爲と云ふことの反對に、自然と云ふ語を用ゆることがある、また有機に對して無機、自由に對して必然と云ふ語を以つて、反對の意を現はすことがある、即ち對立付けることがあります。

然し、自然とか無機とか必然とか云ふことが、果して眞に機械的なものと解されてよいであらうか、實は決してさうではない。所謂自然的現象は、常に同一を繰り返へして居て、一見それは機械的な、所謂必然の如くに見られるけれども、實はそれは、大自然の自由であるのである。大自然の自由が、所謂必然の形式を取つて現はれて居るのである、故に、その自由は、いつその必然を破つて、新しき道を歩み初めるかわからない、否、現にその自由は、その自由に依つて、常に新しき道を歩みつゝあるのである。それは、歴史即ち時間の進みがそれを證明して居る、進化とは即ちそれで、宇宙人生は常に創造されつゝあるのである、生の創造である、創造の連鎖である、決して單なる機械的必然ではありませぬ。

而してその創造が続いて、人間なるものが發生した時に、大自然のその自由はその獨立せる一個體即ちその人間なるものゝ中に、比較的少量に織り込まれたのである、これが、人は神に肖せて造られたと古の人が云つたことを新しく説明し

て居るやうなものであります、或は又、人は小宇宙だと他の昔の人が云つたことを新しく説明して居るやうなものであります、然り、人間とは大自然の自由を宇宙意志なるものを、比較的少量に吹き込まれたる一存在であります、此の意味に於て人は萬物の靈長であります。

自己の發見

が、人そのものに進歩があつたことを忘れてはならない。人間が發生してから長い時間が経つた、世界が所謂十九世紀の後半とか二十世紀の前半とか云ふ時代になつた、此の時に到つて、絶えず變りつゝあつた人間は（同時に宇宙人生のあらゆるものが變りつゝあつたのは勿論である、たとへ、天體の運行の如きは、餘り目立つ程のこともなく、また、人間の世の中の社會状態や經濟事情の如きは、特に最近に到つて、大に變化したと云ふ差はあつても）宇宙意志の分量を、段々

多く分有するやうになつて来た、これが即ち、自己が自己を意識するやうになつたと云ふことである、別の言葉で云へば、自己発見と云ふことでもあります、何となれば、意志とは即ち自己と云ふことである、宇宙意志と云ふことは、宇宙の自己と云ふことである、宇宙そのもの、大自己である。即ちこれを分有する量分が次第に多くなつて来た、自己が自己を意識する程度に迄なつたのである、自己発見とは即ち此のことでもあります。

世の中には、近代人の此の自己発見を、社會の經濟事情の變化などと結び付けて生活問題を先驅として考へやうとする態度がある、吾人は此の歴史觀に敢て反對しやうとは云はない、現象界の説明としては、いろ／＼な考への態度のあることを知つて居る、けれども吾人の此の歴史觀、一種の精神史觀とも云ふべき此の見方は、自己発見に到つた根本的、理由に就ての正しくして尊き解答であることを高調し得ると思ふ。

兎に角、此の自己発見なるものは、近代的諸主張の基礎的立場である、誰もが問題とすることの出来ない、(お互が心中に内省して見てさうだ)自明の道理として我々の心を占領する一根本觀念であります。而してこの觀念から、如何なることが流れ出るのであらうか。

所謂部落問題

二つの命題

自己発見は、近代思潮の基礎的觀念である。然り、これは過去の進みの結果であつて、従つてそれは、宇宙意志の目的であると云はざるを得ないと思ふ。言ひ換へれば、過去の進みを要約して見ると、(一)單純より複雑へ、(二)その複雑になつたものが互により密接に影響し合つて行く、(三)そしてその複雑になつた即ち分化した各が、皆次第に個性を發揮して来た……と云ふこれだけになる、そし

てこれは、その儘將來への進みの指針なりと云はざるを得まいと思ふ、即ち宇宙意志の目的なりと断言するのが、論理の正當な歸結だと思ふ。

果して然らば、またこゝから二つの命題に到着することになるのである。(一)此の個性と云ふもの、人間で云へば此の自己と云ふもの、此の個人格と云ふものは、洵に尊嚴極りなきものである、お互に相冒すことを得ざるものである、(二)總ての人間が、各自己を發見して行く、自己を自覺すると云ふ此の進みは、超人的の事實である。人間が自分自身意識して、それを希望すると云ふわけではなくも、時間の進みそのものの中に、必ずさうなる運命(宇宙意志から見れば、自身自身の自由であらう、人間から見れば一種の宿命)がある……と云ふこれであります。

吾人は、以上の二つの命題、これを約めて(一)を人格尊重、(二)を自己發揮の宿命と云ふ、此の二つの命題を大前提として、所謂部落問題を討検して見やうと思

ふのである、而して又、此の問題を眞に理解する爲めには、必ず以上の手続きを取ること、即ち宇宙人生の進み、換言すれば、宇宙人生の真相を眺めて、そこに根據した立場から、その問題を見るにあらざれば、眞の理解は不可能であらうと思ふ、是れ即ち長い論述の跡を辿つて、漸く到達したる此の大前提よりして、本問題を討検しやうとする所以なのである、然り、本問題は、しかく重要にして尊貴なるものであるであります。

佳き日の爲めの運動

所謂部落問題とは何ぞや。これを表面的に云へば、我が國民の間に一つの大きな偏見、妄見がある。それは、一部のある同胞に對して、他の同胞が、差別的な目を以つて見ることである、しかもある賤視の觀念を持つて居る。それで、快く交通をしなかつたこともある、(今日でもそれは決して絶滅しては居ない)多數の

力を以つて、その小數な人々を、壓迫し迫害したこともある（今日でもそれは全く絶滅しては居ない）そして今日では、その傾向は緩和され減少して來たけれども、その謬れる觀念が、全く拂拭し去られるのは、果していつの時であらうか、豫見することを得ざるが如き状態である、否、今日と雖、差別の謬れる觀念を基として、幾多の不祥なる出來事、悲惨なる社會事象が起つて居る。

此の現象に對して、差別見の不合理を説いて、偏見を打破し、妄見を拂拭し去らんと努めつゝある人々も出來た（最近に於ては、政治的に所謂有力な人々もそれに關係するやうになつた）特に、差別的に見られて居た人々の中から、その人々自身の努力で、此の謬見を無くした佳き日を實現せしめんとする運動も起つた、誠に目覺ましき光景である。

兎に角、その謬見を基として起つて居る現象を、「時代」は大問題なりとして眺めて來た、即ちそれは所謂部落問題であります。

問題發生の眞因

一部同胞に對する差別の心、賤視の觀念はどうして起つたか、即ち所謂部落成立の歴史的な説明、これは敢て重大な必要でないと思ふ、何となれば、それは要するに歴史の中の所産、社會的產物であつて、人間そのもの、本來の價值を決定する所以のものでないからである、詳しく云へば、三代か四代前の我等の祖先、即ちわかつて居た祖先が、如何なる社會的地位に置かれて居たとしても、それは要するに人間の浮き沈みである、外形の浮沈は誰でもありうちなことで、長い間にはいろ／＼なことに遭遇するものである。そんなことで、人間そのもの、價值が永久に冒瀆されて居てよい筈がない、否、此の所謂部落問題なるもの、人間價值を認識せぬ罪惡に對する反抗は、裏から云へば、人間價值を認識せよと云ふ運動は、外界に發生原因があるのではない、人間の心の中に、眞の發生原因はある

のであります（此の所の論理はかなり面倒である、靜かに考へて貰ひたいと敢て言ふ）故に、所謂歴史的説明、即ち社會の外面史的な話は餘り必要がないのであります。

勿論、人間の心は其の時代の社會事情、特に經濟組織に大に支配されるものと云ふ説のあるのは私も知つて居る、然し、私の議論は、そんな社會事情や經濟状態の變化も、如何にして起つかと云ふ根本の問題を考へると云ふ點にあるのであります。即ち、要するに、時間の進みは、單純から複雑になり、その複雑は相互關係して居るものであり、（これは人間生活の内容を愈々豊富潤澤にして行く爲めである）そして、遂に總て個性を發揮する、これを人間に就て云へば、各自が自己を發見し、即ち自己を自覺し、その自己の天分を發揮し、それでお互が長短有無を相補つて、深く廣くなつた總てのもの、關係に依つて、益々豊富潤澤になつた人生の悦樂、即ち物質的の所謂文明、精神的の所謂文化を味はつて行かう、

換言すれば、平安と享樂との人生を各自が感謝して行かうと云ふそのことでもあります（然り、人生の真相を、その實際の如くに知るものには、感謝なくてはあらぬ筈である）これが私の哲學です。

だから、手ツ取り早く云へば、今日の所謂部落問題發生の眞因は、人間の内界にあるのだ、心の中にあるのである、時間の進みに従つて、人間は各自に自己を發見して來た、自己を自覺して來た、こゝに眞の問題發生の原因があるのである、故に此の問題は、人間の造つた問題だと云ふよりも、人間を如斯にならしめた宇宙意志そのもの、造つた問題、換言すれば、超人間的な大なる力の爲めに造られた問題、宇宙人生を動かす所の大きな「意志」が造つた所の問題である、輕視し得ざる問題、尊貴なる問題なりと云ふ所以はこゝにあるのであります。

小數意見か多數意見か

所謂差別的事象、これは今日よりも昔日に於て一層甚だしかつた、徳川期の末は、高潮に達した時代とも云へる。此の時代に於て、何故その差別の不合理が説かれなかつたであらうか、人間價値の認識が高調されなかつたであらうか、人格尊重人間禮讃の旗印が、今日高く揚げられて、敢て反對の矢は放たれない、然らば昔日の差別事象の甚だしかつた時に於ては、猶ほその聲は大きくなければならなかつた筈である、然るにその時分には此の叫びがない、これ何故であるか。

此の問題の發生原因が、人間の心の中にあると云ふのは此の點である。人間が次第に進歩して來た、自己を自覺して來た、自分の價値を認識して來た、こゝに問題が發生して來たのである、差別事象は甚だしくつても、自己を自覺せざる人間ばかりの時には、それは決して問題にならなかつたのだ、否、論理は倒様で、

人間が自己を自覺して來たから、差別的事象も減少して來たのである、そして、殘る差別的事象（まだ總ての人が自己を自覺したのでないから、差別的事象は殘つて居る）を問題とし取扱ふやうになつたのである、此の間の理論は大切なのであります。

所謂差別されて居る人々は、其の他の人々よりも數が少ない、そこで、その人々は小數同胞とも云はれる、而して、その小數同胞中のある人々は、人格尊重、人間禮讃の叫びを擧げた、即ち水平運動なるものである。果して然らば、水平運動なるものは、所謂小數意見なりと云はねばならぬ論理である、所が、果してそれは小數意見であらうか、否々、斷じて小數意見ではない。人格尊重、人間禮讃の叫びは、所謂小數同胞中のある人々の聲であるから、その形式は小數意見の如くであるが、實は決してさうではない、と云ふのは、所謂一般民の中に、多數の共鳴者を有するのである、否、多數と云ふ言葉も當らない、今日に於ては、誰か此

の旗印に反対するものぞ、誰れもが賛成せざるを得ざるものになつて居るのである。勿論そこには、心の底からの賛成でないものも多数あらう、これは、總ての人が眞に自己を自覺して居るとは云ひ得ない現状に於てそれも事實である、空華幻影の優越感でも、兎に角一種の優越感である、『彼は俺よりも身分が下だ』と云ふやうな、その優越感から脱却することが出来ない（然り、その人は、人間としての自分の尊貴を知らないからだ）それは氣の毒であり、同時に早く打破しなければならぬ悪見である。けれどもこれは、嘆くべき今日の事實である……：が、それでも、表面的には、人格尊重、人間禮讃の旗印には反対しない、それ程その旗印は、世の中の多數意見になつて來たのである、換言すれば、自己の自覺と云ふことが、人々の心を占領して來たのであります（勿論、水平運動なるもの、實際手段、即ち如何なる方向に、人格尊重、人間禮讃の旗印を先登に揚げて進むべきか、此の實際手段に就ては、人各意見がある、必ずしも、所謂水平社の採

る方法を總ての人に人間價値を認識せしむる最善の方法なりとはしまい、否、水平社の内に於ても、異見を有する人々があるのは事實である、一般世間に於ても亦、種々異なる見解があるのは云ふ迄もない）

自覺圈擴大史

「人間の歴史は、自己を自覺するその自覺圈の擴大史である」とも云へる、然り斯くして自覺圈は次第に擴大して來た、そして、人格尊重、人間禮讃の旗印が、多くの人に依つて支持されるやうになつた、所謂小數同胞である所の人々の中のある人々の叫びが、世の中の多くの人々の心の底の琴線に觸れた、共鳴者の多數が出來た、所謂融和運動者の中の幾人かは即ちその人々なのである、否、水平運動の最初の人々と雖、突如として「人格尊重、人間禮讃」を造り出したのではない。それよりさきに、自己を自覺した人々は甚だ多くあつた、日本にもあつた、西洋

にもあつた、十八世紀の後半より十九世紀にかけて、それ等の人々が漸く多くなつて来た、世の進みが、さうなつて来たのだ、そして二十世紀に入つて、次第にその傾向が大きくなり、所謂歐洲大戰を一期として、その勢は驚くべきものになつたのである、此の大勢の中の一つのものとして、此の傾向の一顧れとして、人格尊重、人間禮讃の旗印は揚げられて来たのである、だから今日に於て、それが多数意見の形になつてしまつて居るのである、つまり、自覺圈擴大史中の、豫定されたる一頁なのであります、それを、偶然の事象だと見て居ては甚だ淺薄な世の中の見方であります。

聖天子、明治天皇

天に口無し、人を以て言はしむと云ふ言葉がある、それは何を言はしむるのであらうか。此の場合、天と云ふのは、單なる蒼穹の意ではない、昔の人も、天を

一つの意志だと思つて居たのである、然り、その意志——天は、聖人偉人の口を藉りて、自分の意志する所を發表するのである、裏から云へば、聖人偉人は、天に代つて、世の進みを豫言して居るのだ、も一つ別言すれば、聖人偉人は、天の意志する所を意志するのである、世の進みを豫言するのである、(斯かる聖人偉人は、歴史の中にも甚だ稀れである)

斯くて、畏れ多くも、聖天子、明治天皇は、天に代つて世の進みを豫言し給ふた、大偉人にてましましたと拜するのであります。

萬機公論に決すべしと宣ふたが、六十餘年後の今日に於て、普通選舉の制は布かれたのであります。

舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべしと宣はせ給ひ、次いで明治四年に、今日所謂解放令なるあの太政官達を發せしめ給ふたのであります。之れ、我が同胞の心の中に、一部同胞を賤視するが如き、その陋習のなきことを以て、それを天

地の公道なりと爲し、しかもやがて、その陋習——偏見は、人々の心の中より取り去らるべき運命の下にあるものなることを、豫見し給ひしにて、聖天子の御聲は、之れ天地神明の御聲なりと私は拜するのであります。

嗚呼、偉なる哉、明治大帝、聖天子の神敕、嚴として世を照らし給ふ。陋習に依る差別の偏見はやがて全く人心の奥底より拭ひ去らるゝであらう、之れ人間の宿命であります、やがて總ての人は、各自己を發見する、人間の尊貴を發見するに到るのであります（然り、古への人は、人は神に肖せて造られたと云つた、或は、一切衆生悉く佛性有りと云つた、人は次第／＼に神によりよく肖て來るのである、だん／＼佛に近寄つて行くのである。但し、此の神佛の語に躓いてはいけない、神は斷じて偶像に非ず、佛は決して枯木死灰ではない）茲に私の此の問題に就ての樂觀があるのであります、私は究極に於ては安心して居るものであります、つまり、偏見打破の運動は、必ず成功するものであると云ふ論證を持つて居

ることである、否、運動があると云ふことが、その儘成效の證據であると云ふ此の理論が、私を安心せしめるものであります。

天業に乗るず

偏見打破の運動は、必ず成功すると云ふ理論があつても、それは斷じて、拱手傍觀を是認するものではない、そこには別の理論があります。

一粒の種を地に落す、それが亭々たる大木になる、これは所謂自然の力である、然し或る場合には、それが枯死する時もあり、不完全な育ち方をする時もある、こゝに人力の必要が生ずる。

「人力」と云ふことを、しばらく「自然」と云ふものから切り離して見る（人間も亦大自然の中の一部だと見るのをしばらく中止する）さうすると、世の中の多くのことは、自然と人間との協力で出来上つて居るのであります。否、世の進

みとは、人間が段々自己を自覚するに到るのだと前に云つた、だから、従つて、自然の上に、人間の力が段々多く加はつて行くものである。此の方面から見れば世の進みとは、人力が自然の上に加はつて行く、その分量が多くなつて行くことだと云つてもよいのである。

而して、大きく見れば、人間も大自然の中の一部であるが、宇宙意志の一部を分有し、その分量が段々多くなつて、遂に自己を自覚するやうになつたのである(こゝが面白いところですよ)から、自然の傾向として、意識的にも、自然の上に自分の力を加へたいと希望するものである、人間の心の中に、その希望が湧くものである。科學者の仕事は大體此の希望の上に築かれたものである、自然と人間と協力して、人生に役立つあることを爲さんとするの努力であります。

故に、意識して世の進みに手傳ふならば、換言すれば、世は進むものである、そして進みの内容は、單純より複雑に、そしてその複雑は相關係し、その關係の

一つ／＼は、互に個性を發揮して行く、これを人間に就て云へば、各自に自己を自覚して行く、従つて、その尊貴を認識する……ことである、而して此の進みは、宇宙意志の意志するところである、斯うすることが天の仕事なのである、故に、此の仕事に手傳ふならば、即ち、人間價値を認識せざる惡見偏見を打破し、その蒙を啓くの運動をするならば、それは、天の仕事の片棒を擔ぐものである、斯くて、融和運動、舊來の陋習に因る偏見打破の運動を爲すものは、之れ天業に參ずるのである。嗚呼、何と聖なる事業ではないか、而して之れは是れ、私の思ふ融和運動の哲學であります(天業に乗ずる意識的努力の必要は次に説く)

努力の必要

(41) 以上私は、私の思ふ融和運動の哲學を述べた。讀む人或は此の論述を迂遠なりと云ふかも知れない。然し、論理を突き詰めて行けば斯うならざるを得ないだらうと

思ふ。而して、論理を突き詰めて行くことを迂遠なりと云ふのは、浮華輕佻である、浮華輕佻は現代の病患である。浮華輕佻の輩は、事物を外観だけで決定してしまう、これを淺薄と云ひます。

此の「淺薄」が時代を横行濶歩して居ることは、嘆かはしきことの最大なるものである。現代は、思想の數が甚だ多いと云ふ、然し、實は、それに對する一知半解の徒の輕卒と云ふことがよくないのであります。此の意味からも、單なる迂遠呼ばゝりは慎しむべきであります。

何事に依らず、一知半解の淺薄者流は、醜きものであり害惡であるが、特に此の所謂部落問題に就ては、淺薄な見方は慎しむべきである、世の短見者流は、何縣の何事件、何縣の何々問題と云ふやうに、一つの出來事として世の中に顯はれば、それが重大問題だと思ふ、然し、事實はそれと反對で、本來重大な意義のあるものなるが故に、時として、大きな出來事として世の中に顯はれることがある

のである。此の倒様の論理を知らなければいけないのであります。

生まれたる子は、必ず生るべき運命の下にあるのである、たゞ、安産すべきか難産の憂き目を見るべきかは、妊婦の節制と、産婆の技倆と親切と、産室と其の附近とが、節度宜しく準備されて居るか否かに依つて決するのである。人間が人間の尊貴を自覺するに至るのも、必然の世の進みである、然らば、舊來の陋習に依る偏見惡見は、やがて拭ひ去らるべき運命の下にあるのだ……けれども、此の必然の世に進み、これを坦々たる大道として滑かに行かすむるか、或は荆棘茂き峻峻の難道たらしむるか、これは我等（差別をした人々、差別された人々）の覺悟、心がけ如何に依るのである、再言すれば、偏見はやがて人心より拂拭されるであらう、然し、その道程の難易、時間の遲速は、我等の努力の綜合の結果でどうにでもなる、之れ各人が、各努力の必要のある所以である。然り、天業に參する重大事だ、肅然として考察しなければならぬ、嚴然として行動しなければならぬ

のであります。

我が清和運動

清和會の眞面目

前述に於て私は、私の思ふ融和運動の哲學、即ち融和運動の據つて立つ基礎的思想と此の運動の重大さを明かにしたと思ふ。而して、我が清和會の運動もまた此の意味に外ならないのであるのは勿論であつて、同時にそれを闡明したことになると思ひます。

乃ち要約して云へば、清和會の運動は、人間性の尊重を萬人に知らしめんが爲めである、裏から云へば、人間性の尊貴と云ふ人生の光明に對して、目を蔽はんとするその偏見を打破して、融和親善、國民諸和の新天地を建設せんとするものである、即ちその偏見は、所謂部落問題として世上に存する舊來の陋習である、

然り、此の舊來の陋習が、人間性の尊貴を認めざらんとする偏見の中の最大なるものである（此の偏見は、所謂部落問題と云はれて居る問題の外にも、その醜惡の手を延ばして居て、人間の心の「賢明」を蔽ひ隠さうとして居る方面は尠くない）故に此の偏見を人生より拂拭し去つて、此の偏見より生ずる社會の諸のトラブルを無くし、萬人をして共に相禮讚し相尊敬し合はしむる世の中を建設せんとするものであります。

而してその手段、總ての人をして人間價値の認識、人間性の尊貴を知らしむるに、如何なる手段を採るべきか、即ち運動の方法は如何。之れは、清和會は清和會としてまた獨自の見解を有するものである。けれども此の點は他日に譲らう、今はたゞ、融和運動の哲學を説いて、清和會の立場を明かにしやうとするのであります、そして、此の運動の尊貴と、此の問題の重大さを、大方の諸君に知つて頂くかうと思ふのであります。

311

668

兵庫縣清和會設立趣意書

人類平等ハ天地ノ公道ニシテ亦實ニ明治維新諸制改革ノ眼目タリ、一國文化ノ發達社會人類ノ進歩
 一ニ懸リテ此ノ觀念ニ根源ス
 惟フニ我邦立國ノ精神タル君臣一系ノ體制ハ自由平等ヲ原則トシ國民ハ舉ケテ陛下ノ赤子ニシテ此
 ノ間何等ノ差別的觀念ヲ容サス然ルニ武門執政ノ餘弊ハ自ラ階級的差別觀念ヲ誘致シ永ク一ノ慣習
 ヲ成セリ
 明治天皇英明御親政ノ初頭先ツ此ノ弊ヲ認メラレ五箇條ノ御誓文ヲ下シテ國政ノ大綱ヲ示シ給ヒ次
 テ太政官ヲシテ四民平等ノ布達ヲ發セシメ給フ爾來歲月ヲ閱スルコト既ニ五十餘年ニ及ヒ國運ノ發
 展亦昔日ノ比ニ非スト雖モ因襲ノ久シキ今尙舊來ノ陋習ニ囚ハレ動モスレハ國民諸和ノ實ヲ舉ケ得
 サルノ憾アルハ嘗ニ人道上看過スヘカラサル所タルノミナラス上仁慈ナル觀慮ニ對シ奉リテモ洵ニ
 恐懼ニ堪ヘサル所ナリ抑モ差別的觀念ノ存スル所眞ニ文化ノ發達時期シ難ク眞ニ國家ノ富強時期シ
 離シ一部社會ノ者力向上的精神ヲ消磨シ退嬰姑息ノ境遇ニ甘ンスルカ如キ亦主トシテ之ニ原因セル
 カ如シ吾人深ク刻下ノ時勢ニ鑑ミル所アリ縣民ノ一致協力ニ依リ從來ノ因襲的偏見ノ絶滅時期シ各
 其ノ材ヲ伸ヘ德ヲ磨クノ機會ヲ得シメ一面地方改善上必要ナル各種ノ施設ヲ講シ以テ社會共榮ノ道
 ナ計リ國民諸和ノ實ヲ舉ケムコトヲ期ス冀クハ吾人ノ微衷ヲ諒トセラレ本會ノ爲メ直接間接ノ援助
 ナ寄セラレンコトヲ

昭和二年二月十五日印刷
昭和二年二月二十日發行

(定價金五錢)

神戸市東須磨字前ノ子十二番地ノ二號
岡田修養保護院內

編輯人 兼 内海正名

印刷人 辻左武郎

印刷所 神戸市三宮町一丁目三百二十番邸
合資會社明輝社

神戸市下山手通四丁目三十八番地
兵庫縣社會課內

發行所 兵庫縣清和會

電話葺合二二〇〇番

